

北越白根名物 大凧合戦を見る

巖谷小波

凧といえば正月のものとのみ、子供の時から思い込んでいた私も、眼を一たび地方の空に放つと、そこには正月以外の凧行事が、それぞれいろいろな景観を呈していることがわかる。

例えば長崎のハタ合わせのごとき、これはかつて大森あたりの高台で、在京県人の群れによって行われたものを、かつて案内されて見た事もある。また遠州や阿波辺ではすてきな大凧を揚げるということも聞いていた。けだし凧と花火とは地方ほど大きく、また盛んなものである。

ここに新潟県は両蒲原の白根町という所には、三百年來の歴史を持った一種独特の凧合わせがあつて、その実況の写真帖は、かつてその地の関根蘇堂氏の手から畏れ多き辺にも台覧に供した位。元來凧揚げのはやるその県下でも、殊に名の通つた行事なのである。

一体この白根というところは、例の信濃川の支流にあたる中ノ口川を間にして、南北に町村が相對しているが、昔は新発田領と村上領とその所轄がちがつていたので、一種の敵愾心の発露から、たがいに、凧を揚げあつて、この川の上で引っからめ、更に糸を引きあつて、その勝敗を決するのである。背水の陣という事は聞いたが、こうして川を挟んでの合戦は、正にこれ

腹水の陣面白し凧戦

こうした古例が今日までも引きつづいて、年々六月の始め即ち農閑の時期をもつて南北の両白根、即ち商家側と農家側とが、各町各字で凧をこしらえ、これを川の上で戦わせる事になっている。そのため「凧の白根」といわれて、土地の名物になっているのだ。

私は去年の春その地に遊んで、その話を聞いた時から、是非一度見たいと思つたが、今年は例の蘇堂君をはじめ、野沢知若子、佐竹松声などという厚交ある人々に迎えられて、親しくこれを見る事が出来た。

時は六月の十二日であつた。その二日ほど前からすでにその催しは始まつていたが、折から入梅の薄曇りに、思わしい風も出ないので、今日はどうかと案じられていたが、午後の三時頃から漸く合戦もたけなわだという注進に、直ちにその戦場へと向かつた。

ただし一般の見物は兩岸の土手の腹をスタンドにして、ここに山を築くのだが、私等は別に大伝馬に乗つて、まず中流へと出たのである。こうすれば兩岸が一目で、両軍の掛け引きがよく見られるからだ。

ただ見れば川を縦にしてその左右の土手からは、大小十数の凧が、今しも戦いを挑むべく、その雄姿を現わしつつある。さながら昔の大將が、我こそ何の某と名乗りあげて出るような形で。

しかもその凧の大なること、これがまた想像以上だ。まず一番大きいのは四間半に三間半の長方形。何の事はない、絨緞でも空へ舞い上がったようだ。もっともその図柄は曾我五郎、大高源吾、上杉謙信、達磨ないし蝶花などで、東京の子供等が揚げるのに変わりはない。

別にまた六角一亀甲形の物がある。これは前者に比して小さいが、それでも径四五尺から、積一坪位はあるらしい。

こうした大きな凧を揚げるのだから、定めし強い風が要るだろうとは、誰しも常識から想わざるを得ない。ところがこの凧合戦には敢えてそれほどの強風を要しない。

ただ風の向きさえよければ、そのころをはかって、大勢の者が綱にすぎり、ソレツという合図のもとに、一斉に土手の上を走ると、その勢いで凧は地をはなれて、少し空に揚がったと思うと、斜めに川の方へかしいで来る。それが糸目の付け方にあるので、即ち北軍のは南に、南軍のは北にと自然にかしぐように仕掛けてある。

挑みよる凧や斜めに川の空

そしてそれがからみ合ったと思うと、たちまち両方で引き合うのだがこうなると双方凧を一緒に川中に落とし込んでしまう。

相組んで川に落ちたり凧戦

けれども人には事ともせず、これから双方で力をきわめて、その糸を引き合うのを、見物はまた手を拍ってフレイフレイと野次り立てる。その中にプツリと切れて、その糸を取った方に軍配があがるというわけだが、こうなると何の事はない綱曳となって果てけり凧戦

である。

この時の糸の引き加減に、巧拙のあるのはいうまでもないが、その糸をよるのが又大層な事で、即ち毎年それに掛るものは、ほとんど精進潔斎の形で、一心にこれを撚りあげるのだそうだ。そして勝負にも切り取った糸の多いほどを、勝利の大なるものとしている。

さて私の見た時は、始めは風の都合でか、一向はかばかしい勝負が無かった。折角双方から名乗りあげて、川の空へと揚がってきても糸の出方で凧が合わず、その中に気がぬけてしまうと余儀なく土手の上におろし、又前の所へ担いで行って、再び空へとのをしあげる。

こうして幾度も睨み合っただけで、勝負もせずにおいてしまうのは、まるで大相撲の化粧立の通りだ。

もっとも小さい、例の六角の方は、ときどきそこここで小ぜり合いをやって時に相手に肩すかしを食わせ、そのまま水中に落とし込んでみたり、またちょっと渡り合っては左右へ飛びのいたりするところは、丁度ショッキリという形だ。

そのうちに番数も進んで、日も西に傾けば、やや冷えつくころ、猛然と舞い上がったのは北軍の横綱達磨凧であった。

すると丁度これに対して、南軍から名乗りをあげたのは、これも大関格の曾我五郎だったが、それとばかりに皆片唾をのむとうまく空でからみ合った。そしてエイエイと引き合うことおよそ二分半ばかりにして、勝負あったと思ったら、矢張り糸は北軍にとられて、達磨の勝にはなっただが、その勝負も相手と共に、すでに水中に落ちたのだから、こうして引き上げられた時は、はや骨ばかりになっていた。

勝凧の骨は砕けず浮かびけり

かくてこの日の勝負は、この達磨に占められたが、あらかじめ贈られた東京白根会の優勝旗や各新聞社、タクシー会社などの旗やカップもこのために、皆北軍のものになってしまった。

そこで私も

達磨凧本来空の司かな

の一句を揮って後にその組へ寄せたのであった。

けだしこの種の凧合戦は、各地で行われるであろうが、ここには川を間において、その上でのみからめ合わせ、勝負には必ず水中に落ちて、今まで美しく画き立てられたものも、瞬間に骨と化してしまうところに、男性的の痛快さもあって、そこにまた特色が存するのである。

そしてこの凧合戦には、双方ともに武士道を重んじて、決して卑怯な振る舞いはせず、したがって意趣の喧嘩などは、決してないのをまた誇りとしている。

勝敗は水に流して凧戦

(昭和三年七月週刊朝日)

出典：本山桂川編：「紙鳶図録」日本民俗研究会発行 1930

(日本民俗研究会が民俗研究 第十八輯)